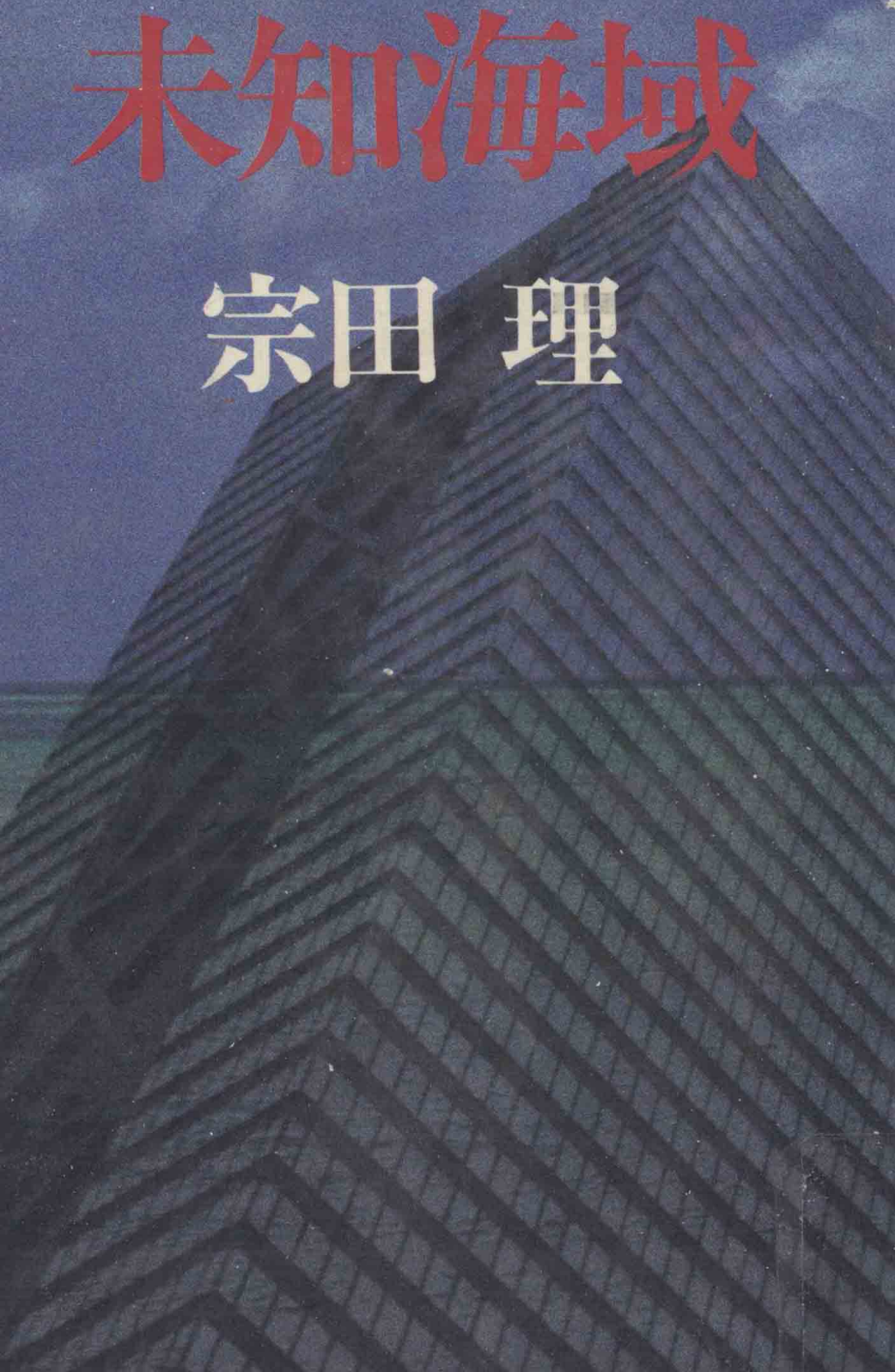


未知海域

宗田 理



宗田理

知海域

河出書房新社

未知海域

©1979

著者 宗田理 そうた おさむ 発行者 清水勝

昭和54年5月20日初版印刷／昭和54年5月30日初版発行
〒162 東京都新宿区住吉町九五 発行所 株式会社 河出書房新社
電話東京(355)5311(営業) (355)5321(編集)

振替東京0110802

印刷 晧印刷株式会社 製本 小高製本工業株式会社

定価はカバー・帯にあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

I	遭難	5
II	東経百六十度	34
III	ホツスイ号の積荷	60
IV	檳榔子の島 <small>ブランチ・ビヤン</small>	86
V	南洋華僑	114
VI	マレーシア航空五二便	142
VII	シンガポール川	171
VIII	犬の口	197
IX	赤い蝶	229

未知海域

航海が必要だ

生きることは必要でない
へ古い船乗りの諺

I 遭難

命じた。

そのとき、安川漁業の第六安川丸は十四カイリの沖にいた。安川丸は千五十一トンで、同国の規則では十三カイリ以内に入れないからである。安川丸の船長は、その旨を無線電話で臨検隊員に連絡した。返事は、命令だから集れということであった。そこで九・五カイリ地点の現場に急行した。

これが漁業区域協定違反だということで、第六安川丸はモーリタニア側に拿捕された。もちろん船長は、命令で入ったのだと反論した。警備艇長の主張は、臨検隊員は勝手に言ったかもしれないが、自分はそのような命令は出していないというものであった。

安川漁業の安川隆作社長と友永俊朗漁労部長は急遽モーリタニアに飛び、水産局に日参して事情を説明したが受入れられず、第六安川丸はヌアディブ港の岸壁に係留され、一億一千万円の罰金と、一億円相当額の漁獲物、二千万円相当の漁具の没収を言いわたされた。

これに対して、セネガル駐在の日本大使も事態を重く見て、セネガルからモーリタニアの首都ヌアクシヨットに飛び、大統領、水産大臣と交渉をつづけている。

モーリタニア発 焼津市安川漁業宛 至急電報
〔三〇〕ヒ ダイ六ヤスカワマル モーリタニアケイビテ
イニヨリ リヨウカイシンパンデ ダホ〕

一九七×年七月三十一日、八月六日付朝毎新聞より
要約

七月三十日、西アフリカのモーリタニア沖九・五カイリの海上で操業中の日本漁船に、モーリタニア警備艇が接舷すると操業許可証の提示を求めた。日本漁船はモーリタニア水産局発行の仮許可証を見せた。この仮許可証は本証の用紙がないからと仮に発行されたものである。しかし、警備艇長は、これを違反であるとして付近で操業中の十七隻の日本漁船すべてに集合を

九月十日 朝毎新聞夕刊より

本土直撃コースを自動車並みに加速して北上した台風九号は、十日朝、五島列島、福江の南西約三百三十キロの海上に達し、九州と四国の全域、中国地方の一部を風速十五メートル以上の強風雨圏に巻き込むとともに、近畿、東海、関東、東北各地も九日夜半から十日朝にかけて、台風接近に伴う特有の断続的な強い雨が続いた。台風は進路を西寄りに向け、九州西部を暴風雨圏がすすめて、対馬海峡から日本海に抜ける公算が強まってきた。このため、関東地方への影響は峠を越したが、依然「強い大型」のエネルギーを維持しており、西日本はもとより、今後の進路によっては北日本一帯も警戒をゆるめられない情勢。

この日正午の東京の気温は二十九・八度、湿度は六十七パーセント。

一日中蒸し暑い、いやな日だった。じっとしていてもからだ全体が汗ばんでくる。夜になってようやく風が出てきた。

浅丘美樹は時計を見た。九時四十分。アリタリア航空七七六便が到着してから三十分経った。この時間、羽田空港には東南アジア、ヨーロッパ南回り便が次々と到着する。到着ロビーは、出迎人でごったがえしていた。肩越しに出口の方を見ると、どの便かわからないが、通関手続きを終えた乗客が、ひっきり無しに出てくる。

「彼、わかるかしら」

兵藤梨枝子が心細い声を出した。

「背が高くて、色が黒くて、丸太ン棒みたいな腕をした男を捜せばいいのよ」

口に出した途端、友永俊朗のイメージが鮮やかに甦ってきた。胸苦しくなって吐息をついた。会うのは半年ぶりである。

「来たわ」

ずっと目を凝らしていたのに、最初に友永を見つけたのは、二年ぶりだという梨枝子の方だった。

友永俊朗は、背の低い、がっしりとした体格の老人と一緒に出てきた。老人は立ち止って友永と二言、三言言葉を交すと、自分だけ一人、足早に人混みの中に消えた。その老人の後姿を、友永は立止って食い入るように

見ていた。

「行きましょう」

耳の端で梨枝子の声がした。美樹は動悸が激しくなつて、足が竦んで動けない。

友永は、真直ぐこちらに向つて歩いてくる。二人はその前に立ちほだかつた。美樹は、わざと友永とぶつかつた。目が合った。

「なんだ、君か……」

顔が黒いせいいか、歯だけがやけに皓く見える。

「なんだ、はないでしょう」

「しばらくじゃないか。だれか出迎えか」

と言いかけて、美樹の後ろに隠れるようにして立っている梨枝子を見つけた。

「しばらくです」

梨枝子は頭を下げた。

「二人で、あなたを出迎えにきたのよ」

「かつごうだったって、そうはいかないぞ」

友永は美樹の眸をのぞきこんだ。この目で見つめられると、いつもからだの芯の方がふるえてくる。

「ほんとよ」

美樹は梨枝子の方を振りかえつて相槌を求めた。梨枝子がうなずいた。

「どうして、きょう帰ることがわかつたんだ」

「会社で聞いたのよ。いまの人、社長さん？」

「そうだ」

「いま、時間あるかしら」

「ある」

しばらくぶりで会つたというのに、取りつく島もないほどぶっきら棒な男だ。

「このコーヒーショップで話がしたいんだけど」

美樹は友永の返事を聞かずに、くると背中を向けた。

「兵藤は元気？」

後ろで、友永が梨枝子に話しかけているのが聞えた。

「それが……」

梨枝子が口ごもっている。

「遭難したのよ」

美樹は足を止めると、振り向きざま言った。友永に突き飛ばされて、からだがよろけた。それを友永が危く支えた。

「遭難？」

友永の声の大きさに、周囲の人がこちらを見た。

「そうなの」

梨枝子は首を垂れた。友永はそれきり何も言わず、自分一人、大股で先に立って歩いて行った。

コーヒーショップの中は混雑していた。友永は奥の席を見つけて腰をおろした。テーブルの上には、前の客のコーヒーカップや、飲みかけのジュースのグラスが片づけられずに残っている。

「兵藤が遭難したって？ いつのことだ」

友永の顔はいくらか蒼ざめて見えた。美樹が友永のこんなに硬い表情を見るのは初めてだった。

「十日ほど前。ニュージールランドで」

「そう言えば、毎年二カ月くらい行くと行っていただけだ……」

「こととして三年目なの」

友永俊朗と兵藤群来男は水産大学のクラスメイトで、二人ともヨットの選手だったせいもあり、四年間ずっと一緒に暮した。当時高校生だった美樹と梨枝子は、二人の下宿に遊びに行ったり、ヨットに乗せてもらったりした。

大学を卒業すると、友永は大手の水産会社を蹴って、

焼津の中小水産会社である安川漁業に就職した。兵藤は北海道出身だったせいもあり、地元の北海道漁連の増殖研究所に入り、ずっとサケの孵化放流に取組んできた。

梨枝子と結婚したのは六年前のことである。

「梨枝子、あすの朝ニュージールランドへ発つよ。きょう友永さんに会えたのは、兵藤さんの引合せかもしれないわ」

「信じられないな。あいつが遭難するなんて」

友永は両手で頭を抱えた。

「ニュージールランド最南端のステュアート島から、船をチャーターして海へ出て行ったきり戻らないんですって」

「ステュアート島？」

「毎年、休みをとって一人でその島へ行っているらしいの。だから、だれも彼がなんの目的で、どこへ行ったかわからないの。ここに彼からの最後の手紙があるから読んでみて」

梨枝子は、ハンドバッグからエア・メール用の封筒を出した。一字ずつ几帳面に書く見覚えのある兵藤の字だ

った。

ニュージールランド最南端の島、スチュアート島にやってくるのもこれで三度目。この前は、サウスアイランドのブラフという町からフェリーで渡ったのだけれど、こんどはインヴァーカールからマウント・クック航空の小型水上飛行機にした。フェリーだと二時間半かかるのに、飛行機だと二十分。あつという間に着いてしまった。

ニュージールランド原住民のマオリ族は、オーロラの色をマキウラ（空焼け）と呼んでいる。オーロラを見たことはないが、いつきてもこの空の色は素晴らしい。この空を君に見せられないのが残念だ。

スチュアート島は、面積一七四〇平方キロほどの三角形の島で平坦地はほとんどない。島民はハーフ・ムーン湾の、この島唯一の部落オーバンとその周辺に住んでいる。この湾にはウミツバメやカモメが群れ、ときにはクジラやイルカを見ることができそうだ。

あす、ぼくは海に出かける。一週間の予定だ。ことしこそ、ぼくの仮説を証明するものを持って帰るつもりだ。

りだ。いままで君には黙っていたけれど、一週間後、ぼくがそれを持ち帰ったら、日本中、いや世界中が驚くにちがいない。期待してはほしい。君にはいちばん最初に電話で報せるから。

今夜は眠れそうにない。

八月三十一日

梨枝子へ

群来男

友永は読み終った手紙を梨枝子に返した。

「ここに書いてある『もの』って何かしら」

「兵藤の場台、魚しか考えられないな」

「世界中が驚くっていうんだから、ニュージールランド沖で見つかったっていう怪獣じゃないの」

美樹は、なぜいままでそのことに気づかなかったかと思つた。

「人類は海のごく一部しか知らない。殊に南には未知の海域がいっぱいある。だから何が見つかったって不思議じゃないけれど、怪獣なんかではないことはたしかだと思ふよ。あの広い海の中から、そんなものを見つければ

うとするのは、藁の中の針を捜すよりむずかしい。というより無意味だ。兵藤はそういうことをやる男じゃない

「なぜ、だれにも黙って行ったのかしら」

「兵藤がニュージールランドへ行っていたのは、サケの孵化放流だろうか？」

「そう」

梨枝子がうなずいた。

世界のサケ科魚類は、北太平洋産のサケ属（ベニザケ、シロザケ、マスノスケなど）と北大西洋産のニジマス属（サルモラなど）に大別され、いずれも北緯三十五度以北の水温二〜十三度、塩分濃度が千分の三十二〜三十四の亜寒帯冷水域に生息している。

ベニザケ、シロザケ、カラフトマス、ギンザケ、マスノスケの五種を一般に「北洋のサケ」と呼ぶが、これらは公海上で混成し、カリフォルニア海流、ペーリング還流、アラスカ還流に乗って大回遊する。その大半がソ連の沿海州、カムチャツカを中心とする極東地方の河川を母川としている。

サケは生れた河川から海に出て回遊、二年から四年経

って成魚になると、再び母川に戻ってくる。その回帰の機能については、大洋を遊泳中は太陽などの天体をコンパスとして天文航法を行い、河口に近づくと河川の水質の違いを嗅覚で識別するなど、諸説があるが、まだ、よくわかっていないというのが実情である。

このサケの習性から、母川のある国が全面的に漁獲の権利を持つ、との主張が二〇〇カイリ時代の到来とともに米、カナダ、ソ連の主張を中心に国際的な大勢となつた。

母川へ回帰する途中の公海上で、日本の大規模船団が待ちかまえて獲るいわゆる沖取り漁法は、他国の財産の横取りであり、資源の略奪だと国際海洋法会議を通じて、ソ連、アメリカ、カナダから批判されてきた。事実これら三国は沖取りは以前からしていない。

こうした現状を打開するために、日本の河川でも大量のサケの孵化放流が行われ、現在の回帰率は二パーセントをこしている。

ところで、サケはなぜ北半球に偏在して、同条件の南半球に生息しないのだろうか。

南半球にサケ漁場を造成しようという計画は、一九七

二年に大日本水産会によって、チリ南部のフィヨルド海岸で行われた。ここのシンブソン川の支流クラロ川で、日本固有のサクラマスの卵を孵化させ、稚魚を放流すれば、南極海流に乗って南極海を回遊して、南極海に何億トンというオキアミを食べて成長し、成魚になったサケはフンボルト海流にのって母川へ帰ってくるというものである。

これに対して、近畿大学の内田博士のグループは、南半球でのサケの最適漁場はニュージーランド沖であると推論している。

内田博士によると、サケは河川や湖で生れ、一定期間の河川生活を経て海に下る。この後大部分のサケは冷水還流の流れにのって回遊し、性的成熟期に生れた母川に到達、川を溯って産卵する。これが回遊性サケ群である。

一方、還流の異常その他で、成熟期になっても母川に戻れない群は、再生産せずに死滅する。これが離れ群または迷い群である。

このほか、ごく一部のサケは還流にのらずに近海域に生活し、成熟すると母川に戻る。これが根付き性サケ群

である。

北半球がサケの好漁場になっているのは、回遊性サケ群が多いためである。その理由は、北半球は極地をシベリアなどの陸地で、赤道上で暖流域でふさがれ、サケにとって閉鎖型構造になっていて、サケはちょうど密閉された容器の中を、ぐるぐる回って母川に帰る格好になるからである。

南半球は、赤道側は暖流でふさがれているが、極地の方は、南極大陸まで大きな陸地のない開放型構造となっているため、回遊性のサケを海に放つても、還流がなく母川に帰ることはできず、ほとんど離れ群となる。

しかしニュージーランドでは、一九三〇年代にマスノスケがアメリカから移植されたが、回帰し、自然産卵によって資源が維持されている。これは放流後沖合にとどまった根付き性群とみられる。

内田博士が着眼したのはこれらの根付き性群であった。マスノスケは放流河川で長期間安息、十分成熟してから海に下るので沖合にとどまり、離れ群になったのではないか。それならサケの沖合生活を人為的に短縮させ、根付き性群を増加させればよい。

兵藤がニュージーランドに出かけた目的は、南太平洋の海洋環境の調査を行い、その上で日本の進歩した放流技術で、サケをニュージーランドで育てようというものであった。

「向うへ行けば、何か手がかりが得られるかもしれないな。いつ帰る？」

「遺体の収容ということは望めないから、一週間くらいで戻るわ」

「帰ったら、もう一度話を聞かせてくれないか」

「焼津の会社に連絡すればいいの？」

「いや、美樹さんに連絡してくればいい。会社にはいないから」

「あら、まだどこかへ行くの？」

「そうじゃない。くわしいことはあとで君の店に行つて話すよ。ところでポールスター、まだ潰れずにあるんだらうな」

「ところがやっているの。案外しぶといでしょう」

友永と会々と、つい気持が上ずってこんな調子になってくる。

新橋駅の近くには、その猥雑さの故に存在理由があるような、飲み屋街の一角がある。終日、近代的なビルの中にいると、ここへ来てはじめて、人間らしさを取戻せるせいかもしれない。

ポールスターはそういう場所であった。ただし、名前を頼りに探しても見つけるのは難しい。そんな看板はどこにも出ていない。この店にやってくるのは馴染みばかりであった。

友永は美樹につづいて、焼鳥屋の脇の狭くて暗い階段を上る。二階の踊り場のところにドアがあり、押すと蝶番が錆びているのか、きしむような音を立てた。いつ来ても同じだ。

「あら、ママお帰りなさい」

カウンターのなかから若い女が微笑いかけた。

スツールで、男が一人ポトルを前にして飲んでいた。

男は顔を上げると、

「ママ、ずいぶん待ったよ」

といくらか不機嫌な声で言った。

灰色に燻んだ壁には、太平洋海底図、大航海時代の古地図の複製、海や船の写真が無造作に貼ってあり、その

余白に、海に関する詩などがマジックでなぐり書きしてある。棚には、グラスやボトルと一緒に珊瑚や貝殻が雑然と置いてあった。それもこの前来たときと変らない。

美樹は二人を紹介した。男は浜本と言ったあと、

「友永さんと言えば、これを書いた人ですね。ママに聞いて一度会いたいと思っていました」

と壁を指さした。友永は壁に目をやった。二、三年前に書いた落書がまだ消されずに残っている。

Navigare necesse est, vivere non est necesse.

「航海が必要だ 生きることは必要でない。いい言葉ですね。だれの言葉です」

「大航海時代の古い船乗りの諺らしいです」

「あなたも船乗りですか？」

「私は漁師です」

「友永さんは、ついさっき西アフリカから帰ってきたところなのよ」

「西アフリカですか。失礼ですがなんとという会社ですか？」

「安川漁業というちっぽけな会社です」

「安川漁業？」

それまで眠っていたような浜本の目が急に光った。

「あら、ご存知？」

「ママ新聞読んでないの？ この間モーリタニアで拿捕されて、とてつもない罰金を言い渡されたじゃないか」

「知らなかった」

「そのことで現地まで行ってきたんです」

「ひどい話ですね。それで結局どうになりました？」

浜本の表情から酔いは消えていた。

「裁判か示談金かということになったのです。しかし裁判すれば船と乗組員は拘留されたまま何年かかるかわからないというんです。選択の余地はないんです。示談金を払って、乗組員三十六人の釈放を取りつけました」

「幾らですか？」

「一億です」

「凄いですね。一億円をぼんと出すなんて」

「とんでもない。日東物産に船を売って金を払ったんです」

「日東物産に？」

浜本は目を宙に据えた。

「日東物産はその船をどうするかご存知ですか？」

「便宜置籍船にするんでしょ？」

日東物産はパナマの現地法人の子会社にこの船を売り渡す。その子会社が韓国の漁業者に船を売る。船を買う資金は日東物産が融資する。その代り代金の分割払いが終るまで、船籍はパナマ法人に押えられ、獲った魚は日東物産の系列の冷蔵庫に直行する。乗組員は韓国人で、船尾にはパナマ国旗をかかげる。これが便宜置籍船である。

日本人の乗組員だと、月約二十万円の給与のほかに、ボーナス、食費、退職金、保険料、往復旅費などを含めると年に七百万円近くかかるが、韓国船だと二百万円程度で済む。一隻三十人乗りだと約一億五千万円ちがうことになる。だから商社は便宜置籍船をつかいたがる。

「一億も払ったんじゃ、会社もこれから大変ね」

「ああ。おかげでおれは鹹さ」

「まさか」

「ほんとうさ」

「そう……、で、これからどうするの？」

「鹹になったのはついさっきだから、将来のことはまだわからないよ。しばらくぶらぶらするつもりだ。この

パーテンにでも備ってもらうかな」

「……でも、友永さんなら、どこだって行くところあるでしょう」

「そうでもないさ。いま水産業界は不況だから」

美樹の夫の宏がヨットで遭難したのは、いまから五年前のことである。美樹にはこれからどうやって生きて行くかあてがなかった。金は宏がヨットを作るために全部はたいてしまつて全くなかった。

おれたちのサロンを作ろうと言い出したのは友永だった。友永は仲間からカンパして新橋のこの店を借り、ポールスターと名づけた。それにどれだけの金がかかったのか、世間知らずの美樹は知らなかった。それがわかったのは三年ほどしてからで、友永は二百万を出しており、そのために一年間船に乗る羽目になった。美樹はそのことを友永に問い質したが、船に乗ったのは好きだからで、金は必要がなかったからだと取り合わなかった。

おれたちのサロンと言いながら、友永はポールスターにやってくることはめつたになかった。くるときはなんの前触れもなくふらりとやってきて、一度去つてしまえば、こんどはいつ現われるかわからない。捕まえようと